

厳しさの裏側に ——内田慶市先生のご退職に際して——

学部長・研究科長
竹内 理

内田慶市先生が、この3月に特別契約教授の任期も終えられ、関西大学からご退職になる。先生とは今から10数年前、外国語学部の立ち上げに際してお会いして以来のお付き合いになる。昨今では、関西大学アジア・オープンリサーチセンター（KU-ORCAS）の業務にもっぱら専念されているため、あまりお話することが叶わなかった。それでもキャンパス内でお会いすることがあると、笑みを絶やさずに、親しく様々なお話をしてくださった。

今ではこのように穏やかな先生だが、初めてお会いした頃は、学問や学部の運営に関してかなり厳しい側面を見せておられた。さらに諸事に一家言をお持ちの、いわゆる「怖い先生」でもあった。先生はすでにお忘れかもしれないが、私が初めて学部長として司会をした教授会において、「君はこれからの任期において何をするのか所信表明もしないのか！」と強いお叱りを受けた。実は事前に、任期中の目標について話す内容を用意していたのだが、先輩方が多数おられる教授会の席で、若輩の新任学部長が偉そうなことを述べて時間を無駄にしてはいけない、と気を遣ったのがいけなかった。お叱りの勢いに気圧されながら、私は慌てて（表面的には何食わぬ顔をしながら）用意していた所信表明を読み上げ、なんとかその場をしのいだのだ。

この話には後日譚があり、しばらくしてキャンパス内でお会いした際に、ニヤッと笑いながら「君、準備していただろう。よい所信表明だったと思う。でも実行するのは大変だぞ」と釘をさされたのだ。その時は、本当に身の引き締まる思いがした。10年以上経った今でも、あのやり取りは、昨日のこのように思い出される。

その他にも折に触れて、かなり厳しいご意見、ご指摘を先生から頂いてきた。しかし不思議なことだが、何を言われようと先生に対して悪感情を待たずやっていけたのは、私が鈍感であったからなのか、それとも先生のご指摘があまりの正論で反論・反発の余地がなかったからなのか、それとも先生のご人徳のお陰だったのか、はたまたこれらすべての複合要因だったのか、いずれかは定かではない。ただ1つだけ確信を持って言えることは、先生は常に信念を持ち、ブレずに進む大学人の模範であったということだろう。様々な学外研究費を獲得し、関西大学

から2つの博士号を取得され、11冊の著作（英文、中文のものも含む）をものにされ、116編の論文を書かれ、35編の教科書を執筆された。その間、吹田市教育委員長、関西大学図書館長、関西大学東西学術研究所所長、大学入試センター第一委員会中国語部会長、中国近世語学会会長、中国語教育学会理事なども歴任された。この素晴らしい業績を前にして、やはり尊敬の念を抱いていたことが、何を言われようと、先生に対して私が悪感情を待たずやっていった真の理由だったと思う。

実は一度だけ「多方面によくがんばっているな」とおほめの言葉を頂いたことがある（たぶん先生はもう覚えておられないだろうが）。これに味をしめ、今度お会いした時に、もう一度先生からおほめの言葉を頂けるよう、これからも鋭意努力しながら、再会を待ちたい。内田先生、ありがとうございました。